

総動員体制のなかの上野動物園

齊藤涼子 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

(1) 本稿の課題

本稿は、東京上野動物園を事例として「戦争と社会」の一断面を見ようとするものである。アジア・太平洋戦争末期、各地の動物園に「猛獣処分」の通達が出たことはよく知られており、これを描いた児童文学『かわいそうなぞう』は小学校の国語教科書に採用されてきた。しかし、上野動物園だけでも27頭もの動物を虐殺するまでの道のりはどのようなものだったのか、特に日中戦争以降、世の中が戦争遂行に傾倒するなかで、動物園がどのように変容したのかという具体相は広く知られているとはいいがたい。

日中戦争勃発後、国家総動員法によって戦争遂行に必要なひとやものの動員が定められ、また精神動員においても、「国民の精神的糾合」を謳った国民精神動員中央連盟が発足し、改編を経て大政翼賛会への吸収に至ったことを見ると、あらためて総動員体制の確立過程は「聖戦必勝」に傾く社会の変容を示しているのであり、動物園も例外ではない。興味深いことに、この間、上野動物園の入園者は増加の一途をたどっている。1937年の年間入園者数が216万人程度だったのが、1938年には250万人を越え、1940年には300万人を突破し、1941年に戦前最高の記録をたたえた（東京都『上野動物園百年史』及び資料編）。その後、1943年の「猛獣処分」を経て急落、敗戦により明治期の水準にまで入園者数は落ち込むが、ではなぜ、1938年から「猛獣処分」までの間に入園者数は上昇したのだろうか。本稿では、上野動物園の催し物と展示動物の変化を探ることで、総動員体制が確立する過程において動物園がどのようにして人心をひきつけ、どのような場として機能したのかを検討したい。

(2) 先行研究について

日本における動物園史としては、小森厚（1963、2000）、佐々木時雄（1975）、若生謙二（1982）などの研究がある。本稿の前史をこれらの研究から跡付けると、日本の近代動物園の成立はヨーロッパの万博が契機になっている。「動物園」という語が初めて現れたのは福沢諭吉の『西洋事情』で、1862年のロンドン万博で使節団が初めてヨーロッパの動物園を見学した記録が基になっているが（佐々木1975）、その後、1868年パリ万博使節団派遣、1873年ウィーン万博への出品を経て、日本の動物園は博物館事業の一部として準備された（佐々木1975、小森2000、若生1982）。

もともと万博のために集められた物産であったので、博物館事業は殖産興業路線の大枠がはめられ（若生1982）、農商務省の管轄となり、1882年3月20日、博物館（現在の東京国立博物館）の付属施設として上野動物園が開園した。その後、国会開設要求を体制の危機ととらえた明治政府が、天皇制を経済的に補強すべく皇室財産の拡大を図ったことで、1886年に上野の博物館と動物園は宮内省に移管されることになった（佐々木1975、若生1982）。宮内省移管後は、帝国憲法の発布、日清・日露戦争を経て、天皇制が確立された時期であり、動物園も発展を続けたが、一方で新規動物の受容や園域拡張などの経費も増大し、慢性的な赤字が続くようになった（小森1963）。

そして、関東大震災で罹災者が上野公園に流浪し、管理の困難が表れたことを契機に宮内省は移管に踏み切り、1924年、「皇太子御成婚記念」として上野動物園は東京市の経営となった（佐々木1975、小森1963）。これより動物園は東京市保健局公園課の所管となり、園域の大規模

改造をおこない（小森2000、佐々木1975）、また遊園地の影響を受け、大衆娯楽的な側面をだした積極経営にのりだしていった（若生1982）。

以上の先行研究は、日本の近代動物園の始祖である上野動物園の成立を意味づける重要な基礎研究であるが、発展史という性格上、動物園の社会的側面は注目されておらず、日中戦争以降の展開については、1943年の「猛獣処分」が触れられる程度で、考察の対象とされていない。

他方、動物園と社会の関わりとしては、アジア・太平洋戦争期の「猛獣処分」を対象とした山崎元（1990）、川島茂裕（1991）の論考がある。山崎は、各地の動物園でおこなわれた「猛獣処分」の実態を検討しつつ、この処分が従来言われてきた空襲時の危険や食糧難に起因したものではなかったことを指摘した。山崎は上野動物園について、都長官の大達茂雄が人々に非常時局を認識させ、戦争に動員するために「魅力的な動物」を意図的に抹殺したことを指摘し、国民にとって魅力的なものを奪って戦争に駆り立てたというのが猛獣を虐殺した真相であると結論づけた。

また、川島は仙台市動物園を事例とし、1944年3月2日に採択された今村武志仙台市長あての「市立動物園即時廃止ニ関スル意見書」を中心に、仙台市会で交わされた議論を検討している。川島は、仙台市の「猛獣処分」は空襲時の危険を建前として、赤字部門であった動物園の処分が眼目であったとし、戦争遂行が第一とされるなかで市の「無駄遣い」を削減する意図があったことを指摘した。

研究状況をみると、総動員体制期は動物園の発展史としては等閑視されているようであり、動物園の社会史としては「猛獣処分」が限定的に扱われているに過ぎないといえるが、動物園史の論点はここに限られないだろう。近代日本のファシズムを文化の側面から追究した赤澤史郎は、この時期、多くの文化諸領域において、国威発揚や戦争宣伝や日本精神の宣伝と全く無関係な文化のジャンルは存在しなくなったと述べたが（「特集にあたって」『年報日本現代史7 戦時下の宣伝と文化』現代資料出版）、動物園を文化施設とみれば、この指摘は重要である。

映画や音楽が取締対象となり、国策協力へ変容したことが検討されている一方、こうした検

討は、動物園研究についてはおこなわれてこなかった。むしろ、総動員体制期に上野動物園の入園者数が伸びたことについて、佐々木は「ひしひしと迫ってくる戦時下の重苦しい圧迫感から、多くの市民は一刻の憩いを動物園に求めたのだろう」（佐々木1975）と述べたし、天王寺動物園が2006年からおこなっている「戦時中の動物園」展の展示評を書いた越智翔一は、同園が1939年以降に入園者数を伸ばしたことを「戦争の中でも安らぎを求める人は多」かった（越智2016）と述べた。しかし、はたして動物園は癒しの場であったのだろうか。本稿ではこの点に留意しつつ、動物園がどのような役割をはたしていたのかに着目して論じたい。

(3) 使用する史料について

本稿で主に使用する史料は福田三郎の『実録上野動物園』（毎日新聞社、以下『実録』）と東京都発行の『上野動物園百年史』及びその資料編（東京都、以下『百年史』、『資料編』）である。

福田三郎は1922年に上野動物園に就職し、飼育課長を経て1953年に退職しており、『実録』はこの30年間の記録である。『実録』が採録された『全集日本動物誌4』（今西錦司・戸川幸夫・中西悟堂監修、講談社）の藤原英司の「解説」によれば、福田の職務は飼育係が主であったが、園長の古賀忠道が召集された後には園長代理という管理職を務め、他に飼料調達係、工事係、獣医など、およそ動物園業務のすべてを経験したユニークな経歴の持ち主であり、それだけにその記録は上野動物園のできごと全般にわたった記録価値をもっている。

『百年史』と『資料編』は上野動物園100周年の記念事業として編纂された、本編593頁、資料編852頁にわたる大部で、同園の正史と呼べるものであり、多くの研究者に参照されている。「あとがき」によれば、準備は100年祭準備委員会の出版小委員会として1976年9月に始まり、小委員会は飼育課長の小森厚をはじめとして、係長、主事などで構成された。また、内部資料のほか、東京国立博物館、東京都公文書館、宮内庁書陵部などから資料を集めた一方、一般図書や新聞などは意図的に排してオリジナリティを求めたところが特徴的である。

1. 動物園でおこなわれた催しの変化 —「軍用動物慰霊祭」

図1：トラの慰問絵はがき(小宮輝之「昔々の上野動物園
絵はがき物語」求龍堂、95頁)



盧溝橋事件が勃発した翌1938年、上野動物園では寅年であることに関連して、元旦からトラにちなんだ展覧会が7日まで催され、下谷郵便局が園内に出張し、入園者にはトラの絵はがきが配布された(『実録』)。このとき、上野動物園では戦地に送るための「慰問絵葉書」が発行されており、裏にはトラの絵、表には「勇猛なる虎は千里の野を駆け、何物をも恐れず、萬敵を斃すと謂はれます。猛虎の如く勇敢なる我忠勇無双の将士により東洋永遠の平和が確立されるのであります」と印刷されたが、入園者に配られた絵はがきもこれと同様のものであったと推測される。元日には移動郵便車の蓄音機から軍歌が絶え間なく流れていたといい(『実録』)、新年が寅年であるのを利用して戦意を高める雰囲気醸成されたようである。

動物園における戦意高揚の道具として着目されるものに、軍馬や軍犬、軍用鳩の展示がある。こうした軍用動物の展示に使われたのが「動物祭」であった。動物祭は1930年から始められ、第1回目は1930年11月22日から3日間にわたって開かれた。『百年史』によれば、この期間の入園者数は5万7000人に達し、売り札中止の時もあったという。このときの様子を新聞記事からみると、「鶴子と亀君に大綬章を／けふは賑やかな上野の動物祭り」という見出しで以下のように伝えている。

おなじみの上野動物園では廿二日より三日

間園内で死んだ動物の供養をかねた「動物祭」を催した。明治十六年に開かれて以来死んで行った動物は皆で七百頭、何しろ(ママ)初めての催しで廿二日は小春日和として朝から園内は坊ちゃん嬢ちゃんで大賑わひ。[中略]

小山の上の広場では動物玩具展、小鳥展が開かれ、そのわきには代表的動物の一日の膳立が並べられてある。見ると大食は象の干草、人参、さつまいも等十五貫五百匁、河馬の同十貫目、ナマケモノがバナナ百匁、その他一貫目ばかりその他等々。

福引場所では一等景品の小山羊、尾長猿、ホロホロ鳥、ローラーカナリヤ、七面鳥等が「さア当ててください」とヲリの中で日向ぼっこをしてゐる。(『東京朝日新聞』1930年11月23日)

動物祭や動物慰霊祭は、これ以降毎年秋におこなわれていたが(『資料編』)、1937年11月21日から1週間にわたって開かれた動物祭ではその内容が変わった。動物慰霊祭は「支那事变軍用動物慰霊祭」となり、軍用動物に関する展覧会が開かれ、軍犬や軍用鳩の実演などがおこなわれた(『百年史』)。この後、動物慰霊祭は飼育動物の慰霊祭に替わって、軍用動物の慰霊祭や感謝祭となった。1939年には3月1日から10日まで、陸軍省と農林省の後援で軍用動物慰霊祭がおこなわれ(『資料編』)、1940年には1月9日から3日間の日程で軍用動物感謝祭が開かれ、戦功動物の慰霊祭をおこなっている(『実録』)。この年は3月にも9日から11日にわたって軍用動物感謝祭が催され、慰霊法要のほか、軍用犬、軍用鳩の展覧会があり、またこれらの訓練や実演がおこなわれた(『実録』)。これとは別に、9月23日には、駒沢大学児童教育部主催で軍用動物慰霊祭が催されている(『資料編』)。1941年にもこの催しは同様に開かれ、3月8日に軍用動物慰霊祭がおこなわれた。ここに東京市公園課長の井下清らが参席したが、この日から10日まで軍用犬の訓練実演、軍用鳩の一斉放鳥などがおこなわれた(『実録』)。また、8月23日には大日本軍用鳩協会が主催して軍用鳩慰霊祭が開かれている(『百年史』)。

それでは、こうした軍用動物の感謝祭や慰霊祭は、どのようなものだったのだろうか。『実録』には、1939年におこなわれた農林省・陸軍省

後援の軍用動物感謝祭の様子が、詳細に描かれているのでみてみたい。このとき、動物園では先に陸軍省から下付された戦功動物の功績を讃えた額面をかかげ、花輪やご馳走を山と積み、その前には軍馬のための献金箱がおかれた。また、陳列場には軍馬が活躍しているジオラマをはじめ、陸軍省、農林省の出品物が飾り付けられ、正門前の二本杉広場では児童乗馬会が開催されたが、1回10銭の料金はすべて軍馬のために献金されることになっていた。この様子からでも、人々に戦争を宣伝教育する場として動物園が機能していたことがわかるが、このときは、さらに兵器を用いた演習まで公開された。再び『実録』に戻ると、感謝祭の間は毎日、近衛師団から騎、砲、輜、機関銃隊が出張して、兵器と軍馬の操作演習や、軍犬、軍用鳩の実演をおこなっていた。期間中の3月3日に東京自治会館前の広場でおこなわれた催しは以下のように描かれている。

近衛連隊（ママ）〇〇少尉の指揮する一小隊が、兵馬もろとも、砂塵をけての勇壮な射撃演習、砲列を布いて、ドカンドカンと空砲をうてば、静かな上野の森にこだまして、遠く戦線を偲ぶ豪快さに、見物人は、大よろこびだった（『実録』69頁）。

このように、戦場さながらの演し物が動物園の娯楽となり、これを通じて軍用動物や兵器に対する知識普及がはかられたのが、軍用動物感謝祭や慰霊祭のもった意味であるといえる。

一方、動物園の催しにみられる戦争の影響はこれだけではなかった。1882年に開園した上野動物園は、1932年に50周年、1942年に60周年を迎え、それぞれ催しをおこなったが、これにも変化がある。50周年記念祭は1931年3月20日から4日間にわたって開かれたが、東京自治会館でおこなわれた記念式典のほか、二本杉広場では愛玩動物が陳列され、動物の知識展、動物意匠展、児童動物スケッチ展、動物漫画展、軍用鳩展、動物供養稚児行列などが催された（『実録』、『百年史』）。新聞によれば、「愛玩動物展覧会」が人気を呼び、小鳥、小動物展示の他に、全国で選ばれた闘犬150頭が化粧まわしを着け土俵入りをするという演出までされた（「けふは動物の天

下／犬の横綱まで登場」『東京朝日新聞』1931年3月21日）。

これから10年後の1942年の60周年記念祭は3月20日に式典を開き、1週間開催されたが、『実録』には以下のようにある。

園内では、大東亜動物分布展、軍用動物展などあって、戦功馬である池月号、越王号の二頭が陳列され、戦功がたたえられたのであった。また軍犬、軍用鳩の訓練ならびに、鳩の通信実演などあって、園内は大いにぎわった（『実録』83頁）。

50周年祭のときにも軍用鳩の展示はあったが、アジア・太平洋戦争期に至ると、より露骨になり、記念祭は軍用動物の戦功賛美と知識普及が中心となった。特に、「大東亜動物分布展」という展示会タイトルは、直前の1941年12月12日に発表された「大東亜戦争と称するは、大東亜新秩序を目的とする戦争なることを意味するもの」という文言にちなんでいるようであり、当時の戦争宣伝を色濃く伝えている。また、1938年の新年に寅年にちなんでトラの展示がおこなわれたように、1939年の新年にはウサギ展がおこなわれ、軍用毛皮に関する内容が紹介された（『百年史』）。また1942年の午年には陸軍省、陸軍獣医学校や軍用保護馬鍛錬中央会などの後援で軍馬展覧会が開かれるなど（『資料編』）、動物園で催される企画の隔々に戦時色がみられるようになっていたのである。

2. 展示動物の変化 —「戦功動物」と「戦利品動物」

(1)「戦功動物」について

動物園で開かれる催しが軍国主義に染まるなか、動物園は「戦功動物」や「戦利品動物」の展示場にもなった。戦功動物とは「戦地で活躍」した軍用動物を指すが、1939年1月4日には北支那方面軍司令官を務めた寺内寿一から、中国戦場での戦功動物として、モウコウマ1頭、シノウマ1頭、ロバ2頭、ラバ3頭、フタコブラクダ2頭、イヌ2頭などが送られてきた（『百年史』）。3月に開かれた軍用動物感謝祭では、寺内の訪問を受けており、このときのことを『実録』では以下の

ように記している。「3日には、前北支那方面軍司令官寺内大将が来園され、かつて北支戦線で苦楽を共にした幾多の軍功に輝く、北支軍寄贈のラクダ、ロバ、シナウマなどと対面した。」

図2：ラクダ舎の前に立てられた戦功動物の飾り
（『百年史』152頁）



では、動物の「戦功」とはどのようなものだろうか。このときに送られたロバは「一文字」と「盧溝橋」という名前であったが、ともに盧溝橋事件の際に弾薬運搬などで「活躍」した（『百年史』）。一文字の「戦功」を挙げると、「昭和13年11月1日調、寺内部隊獣医部」の調書として以下のように記載されている。

戦歴及功績：昭和十二年七月十日河北省宛平県盧溝橋付近ノ戦闘ニ於テ弾薬運搬用トシテ購買シ爾後盧溝橋ノ戦闘及南苑ノ戦闘或ハ北京付近ニ於ケル数回ノ討伐ニ参加シ能ク炎暑及ビ酷寒ニ耐ヘ泥濘ナル悪路及ビ峻峻ナル山岳地帯ヲ巧ニ行動シ弾薬運搬ニ従事シタル功績偉大ナリ（『百年史』152頁）。

調書から、一文字は盧溝橋事件を契機に購入され、南苑から北京まで行軍させられて使役されたことがわかる。このように、現地で購入され、過酷な戦場を引き廻された動物が、ついに不用となり、「戦功動物」と名付けられて動物園へ送られたのではないだろうか。

(2) 中国大陸からの「戦利品」

この頃、「戦功動物」とは別に、戦地で捕えた「戦利品動物」と呼ぶべき動物も送られてきた。もとより、戦利品として動物園に動物を送るのはこの頃に始まったものではなく、1894年から95年にかけては、ウマ、イヌ、イノシシ、旅順で捕獲したフタコブラクダなど、日清戦争で奪った動物が送られていた（『百年史』、『資料編』）。また、日露戦争においても同様であり、『資料編』には、1905年に「満洲産ロバ、樺太産アカグマ、清国産キツネなどの寄贈相次ぐ」とあり、翌1906年には満洲軍総司令官を務めた大山巖からウマシカ（ワピチ）、フタコブラクダが送られている（『百年史』、『資料編』）。

それでは、日中全面戦争以降、動物はどのように送られてきたのだろうか。『実録』によれば、1939年1月21日に、「中支戦線の工兵部隊の部隊長」の栗原宗次という人物から航空便でハリネズミが届いている。添えられた手紙には以下のように記されていた。

昨冬のある日、（ママ）〇〇河畔にそって岳北の敵陣地残敵掃蕩中、敵の遺棄した塹壕の中の一隅にうずくまっているものがいた。はて何ものだろうと、よくよく見ると、大型の亀の子たわしに似た怪物、動かないので、棒でさわると、たちまち、全身に針を立て、丸くなって、手も足も出さず、そのおかしさに、これは珍しいと、袋に入れて持ち帰って来た。それを、飛行便で貴園に寄贈する。（『実録』68頁）

この手紙から、掃蕩作戦の戦果のように動物を送ったことが見てとれるが、日清・日露戦争のときと同様に、動物は侵略の拡大にしたがって送られた。この年2月10日に、日本軍は海南島に上陸しているが、4月22日には海南島産のオオトカゲが1頭、10月10日にはチョウコウワニ3頭がいずれも宮内省を通じて送られた（『百年史』）。海南島からは、翌1940年の12月26日にもテナガザルが海軍省を通じて送られたが（『百年史』）、福田は寄贈者である海南島根拠地の司令官という人物の訪問を受け、同島には他にも大蛇やクマなどがおり、開墾の時に飛び出してきてはかどらないので生け捕るにはどうすればよいかとい

う質問を受けている（『実録』）。

これらにみられるように、中国からの動物は主に略取をもって送られたようだが、この他、湖北省で捕えられたヒョウも同様である。上野動物園には1942年5月30日にヒョウが送られているが（『百年史』）、これは、歩兵第236連隊に属した成岡正久が、湖北省陽新県白砂舗において1941年2月28日に生け捕りにし、部隊で飼育したものである。この経緯は、成岡自身が『豹と兵隊』（芙蓉書房、1967年）という体験記を書き表している。これによると、成岡は1939年12月に第8中隊の曹長として配属され、牛頭山の警戒などを任務としたが、「ヒョウが民家を荒らす」という通報から山へ出かけたところ、巢穴に生まれて間もないヒョウの仔を見つけ、「これは面白い。可愛い赤ん坊だ」と略取したのである。成岡によれば、ヒョウは「軍のマスコット」として可愛がられ、その後、浙贛作戦のための移動によって術なく動物園へ送られたものである。

これら動物略取の様子は、日本兵の中国戦場体験の具体例としても着目される。中国侵略の過程で、日本軍が殺戮・放火・略奪を繰り返したことは多くの調査研究が明らかにしており、なかでも日本兵の戦場体験について考察した吉見義明は、これらの暴力について罪悪感が見られないことを指摘したが（『新しい世界史7 草の根のファシズム』東京大学出版会）、栗原や成岡が野生動物をためらいなく略取したことにも、略奪行為が軍隊内で恒常化していた様子をうかがうことができる。

(3) スルタンからの「贈り物」

このような戦地からの動物は、中国大陸にかぎらず、日本軍が占領した南方地域からもたらされた。中国から戦利品のように動物が送られた一方、南方からの様相は異なっていた。ここでは、1942年に大規模におこなわれた南方動物寄贈の様子をみてみたい。

日本軍は、1941年12月8日にマレー半島に侵攻したが、それから半年後の1942年6月1日には、オオトカゲが寄贈され、10月1日にはニルガイのメス2頭、カンムリヅル2羽、ホオジロカンムリヅル1羽、オーストラリアヅル1羽、キンミノバト8羽、12月11日にはシマウマ2頭が送られた（『百年史』）。（福田は、「カンムリヅル、豪州ツ

ル、ヒクイドリ、金ミノ鳩、インド産ニルガイなどで、シマウマは検疫のためおくれた」としている。『実録』）。では、これらはどのようにして送られたのだろうか。このとき、園長の古賀忠道は召集され、南方軍総司令官であった寺内寿一とともにサイゴンやシンガポールをまわっていた。その途中、動物寄贈について園長代理を務めていた福田宛てに書簡を出している（『百年史』）。書簡は「馬來派遣 同1,601部隊気付古賀少尉」からで、以下のように書かれている。

今度の最高指揮官〔寺内寿一、引用者〕よりの動物御寄贈に就きては、時期としては余り良からざるべきに、良き機会有之し為輸送致すことと相成り候。先般御通知せしエミウは馬來地方を輸送中斃死致し残念に存じ候。動物中、ニルガイ、ヒクイドリ、シマウマ（之は検疫の都合上後程輸送相成るはず）はジョホールのサルタンよりのもの、他は或る印度人の飼育せしものに有之候（『百年史』156頁）。

この書簡の「ジョホールのサルタン」については詳細がわからなかったが、ジョホール州が置かれたイギリス領マラヤは、1941年12月8日の日本軍侵攻から短期間で制圧され、翌1942年2月にはシンガポールが陥落した。上陸からジョホール占領に至るまでは55日間であった。マラヤは「大東亜政略指導大綱」により「帝国領土と決定」し、南方軍政においては伝統的にマレー社会の中で政治的・宗教的な権威を付与されていた半島部各州のスルタンを温存し、利用しつつ統治する方式が採られた（後藤乾一『近代日本と東南アジア』岩波書店）。数々の動物が「ジョホールのサルタン」から寺内を通じて上野動物園へ寄贈されたのには、こうした背景があった。

そして、上野動物園においては、南方動物の寄贈は入園者の増加をもたらした。『百年史』によれば、それまでも軍用動物の知識普及、戦功動物や戦利品動物の展示は軍国教育の一環として入園者が動員されていたが、特に南方動物の展示は、すでに海外からの輸入ルートを絶たれていたときに、目新しい動物が来たということで人心をひき、1941年度には、年間有料入園者314万1,594人という戦前最高の記録、翌1942年度

には、それに次ぐ307万7,435人という記録をたてたという。

南方動物の来着は新聞でも宣伝され、まず、1942年10月2日、「皆様よろしく／寺内大将の贈り物南の珍獣／けふ上野動物園に安着」としてニルガイ、ヒクイドリ、オーストラリアヅル、キンミノバトの到着が報じられている。次に、1942年12月15日に「白猿が来ましたヨ／上野で『皆サンサムイデスネ』」として、「マライ産の真白な蟹喰猿一番と、これも真白な手長猿の牡一匹、それにアフリカ産の縞馬牡一頭」が着いたことが報じられた（両記事とも『東京朝日新聞』）。

これらは「南方方面陸軍最高指揮官寺内大将」からの「銃後市民への贈り物」であるとされ、「南の珍獣」の姿は写真入りで伝えられたが、特にニルガイは「名古屋動物園以外一頭もないといふ珍物」、白いカニクイザルは日本初来園と宣伝された。戦争一色の紙面に写真付きで新動物が紹介されたのは注目されたであろうし、さらに南方方面軍の最高司令官からの寄贈であれば話題性も十分である。人々は戦勝の証を一目見ようと動物園に足を向けたのではないだろうか。

動物園研究においては、総動員体制期の入園者増加を「一時の癒しを求めた」ものと見る傾向があるが、『百年史』の記述と新聞記事に従えば、むしろ、戦争への熱狂が入園者増加を招いたといえる。動物園は憩いの場であったとするより、娯楽施設として戦争宣伝に加担し、人々の精神動員にあってきたとみるべきではないだろうか。

おわりに

検討してきたように、総動員体制期における上野動物園の役割は、ひとつに軍用動物の知識普及の場であり、この目的のため、動物園の恒例行事は次々と戦時色に塗り替えられていった。動物慰霊祭が、飼育中に死亡した動物の慰霊から、軍用動物の慰霊に変化したのはその顕著な例である。つぎに、戦功動物や戦利品動物の展示によって、日本軍の戦果を示す場としても機能した。中国戦場で弾薬運搬などの「戦功」をあげたロバが「一文字」や「盧溝橋」という

勇ましい名前で展示されたこと、中国大陸で略取された動物が「戦利品」のように送られた一方、南方地域からは「スルタンからの献上」という体裁をとって動物が送られたことは、東アジア、東南アジアに「日本帝国の威光」が広がっているかのような錯覚をもたらしたであろう。

以上のように、上野動物園は、政府によって国民の精神的糾合が図られていた時期に、催しや展示動物をつうじて精神動員の一角を担ったといえる。しかしながら、動物園が担った役割は以上に限るものではなく、たとえば、傷痍軍人や戦争遺児・遺族に対して慰安の場を提供したことも着目される。『百年史』と『資料編』によれば、上野動物園では1938年10月から、傷痍軍人の入園が無料となった。また「事変戦没者の遺児」が1939年来訪するなど、断続的に遺児・遺族の入園がある。着目すべきは、これらはいずれも軍人援護会や大日本婦人会（愛国婦人会）の案内で、靖国神社参拝の帰りに立ち寄っている点である。動物園は戦争宣伝の場だけではなく、被害者を慰撫し、国家に抱き込む場としても機能したのである。

また、このように戦争被害者も含めた人々の動員に一役はたした動物園が、なぜ1943年以降に不要視され、動物を処分するに至ったのかについても検討すべきだが、これらは一層の調査を要するため、別稿で論じたい。

引用・参考文献

- 福田三郎「実録上野動物園」『全集日本動物誌4』今西錦司・戸川幸夫・中西悟堂監修、講談社。
東京都『上野動物園100年史』及び資料編。
小森厚「わが国の近代博物館施設発達資料の集成とその研究 明治編2・補遺」日本博物館協会、1963年。
同「日本の動物園の歴史」『動物園水族館雑誌』日本動物園水族館協会、42（1）、2000年。
佐々木時雄『動物園の歴史 日本編』西田書店。
若生謙二「近代日本における動物園の発展過程に関する研究」『造園雑誌』46（1）、1982年。
山崎元「象はなぜ殺されたか」『文化評論』352、1990年6月。
川島茂裕「戦時下の仙台市における“動物園処分”について」『歴史学研究』616、1991年2月。
赤澤史朗「特集にあたって」『年報日本現代史7 戦時下の宣伝と文化』現代資料出版。

北河賢三「戦時下の世相・風俗と文化」『十五年戦争史
2日中戦争』藤原彰・今井清一編集、青木書店。

戸ノ下達也「戦時体制下の音楽界—日本音楽文化協会の
設立まで」『文化とファシズム』赤澤史朗・北河賢三編、
日本経済評論社。

越智翔一「天王寺動物園の「戦時中の動物園」展につい
て」『博物館研究』581、2016年11月25日。

小宮輝之『昔々の上野動物園、絵はがき物語』求龍堂。
成岡正久「豹と兵隊」今西錦司・戸川幸夫・中西悟堂監修
前掲書。

吉見義明『新しい世界史7 草の根のファシズム』東京
大学出版会。

江口圭一「中国戦線の日本軍」藤原彰・今井清一編集前掲
書。

笠原十九司『南京事件』岩波新書。

岡部牧夫・荻野富士夫・吉田裕編『中国侵略の証言者た
ち』岩波新書。

吉田裕『アジア・太平洋戦争』岩波新書。

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書1 マレー進攻作
戦』。

後藤乾一『近代日本と東南アジア』岩波書店。